

幼児の箱庭あそびにおける宗教的玩具の使用について

田中 弘子¹⁾・浅田 剛正¹⁾・真壁あさみ²⁾・伊藤真理子¹⁾・橋田 望¹⁾・稲場 健¹⁾

1) 新潟青陵大学大学院

2) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

キーワード：宗教的玩具の使用、箱庭、幼稚園児

A Study on Use of Religious Figures by Kindergarten pupils in Sandplay

Hiroko TANAKA¹⁾, Takamasa ASADA¹⁾, Asami MAKABE²⁾, Mariko ITOH¹⁾,
Nozomi HASHIDA¹⁾, Takeshi INABA¹⁾

1) Graduate School of Niigata Seiryō University

2) Niigata Seiryō University, Department of nursing

Key words : Use of Religious Figures, Sandplay, Kindergarten pupils

I. 目的

幼児の箱庭あそびについての継続的研究を始めて満4年が経過した。その間、ある年齢段階で宗教的な玩具が現れてやがて消えるという現象が目にとまった。4歳児クラスの幼児に限って、予想外の多さで宗教的玩具を使用する例が見られた。反面で3歳児・5歳児のクラスにはほとんど見られなかった。宗教色を持たない園でのデータであるので、この事実は、宗教的な教育環境の中で育つ幼児とは違った意味で貴重であると考え、事実を記すとともに若干の考察を試みたい。

II. 方法

対象児と倫理的配慮：幼児の箱庭あそびの特徴を研究するために、書面で保護者が協力を承諾した子どもたちのうち、3歳児クラスから5歳児までの3クラスの中で、データが得られた26人。
実施時期：2006年11月から、2010年3月まで。
実施場所：新潟市内の、対象児のかようZ幼稚園の図書室。

実施手順：ひとり30分の目安で箱庭で自由に遊んでもらい、研究者が立ち会い、ビデオに録画する。本論ではまず2006年度後期にデータが取られた26人の幼児について、宗教的玩具を使ったあそびの、年齢によるクラス別の出現率を調べる。次に、その中で、2006年度以降2010年3月まではほぼ3ヶ月おきに継続してデータの得られた10人の幼児のうち宗教的玩具を使った幼児4人を取り上げ、箱庭あそびの経過をたどり、どのような流れで宗教的玩具が使われているのかを、個々に記す。

本研究で言う「宗教的玩具を使ったあそび」とは、町を中心にマリア像が置かれ、その後、戦いや生き死にのドラマが展開される等、マリア像、仏像、神社、教会堂、十字架のキリスト像など宗教的玩具が箱庭に置かれたことをいう。

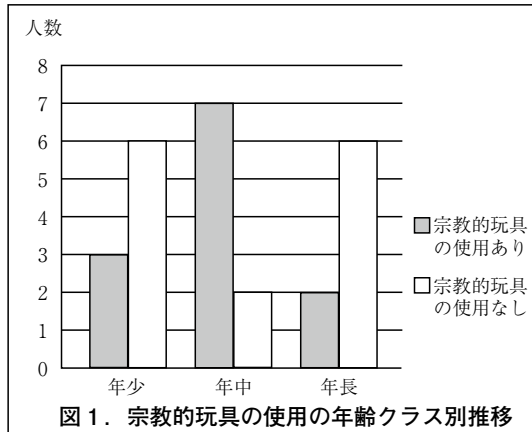
III. 結果と考察

1：統計的処理の結果

2006年度後期にデータが取られた園児26人について、宗教的玩具の使用の有無を年齢クラス別に集計した結果を図1に示す。

12 幼児の箱庭あそびにおける宗教的玩具の使用について

χ^2 検定によって、宗教的玩具の出現頻度に対する年少・年中・年長の年齢クラスの効果について検定したところ、有意傾向が見られた ($\chi^2=5.66$, $df=2$, $p<.10$)。図1のとおり、子どもの箱庭あそびでの宗教的玩具の使用は、年中児のクラスに多く見られる傾向が示唆されたが、今後はサンプルを増やして検証が必要があると考えられる。



2：具体的事例の検討

以下に継続的に調査を行った4名の事例の経過と、その中で宗教的玩具が置かれた様子について詳しい経過を示す。

事例1 (A 男児)

#1 (4歳8ヶ月)：

初回で置かれた宗教的玩具は、マリア像と教会であった。乗り物や建物といった人工的なものを置いていく中で、その中央にマリア像が立たせられ、続いてマリア像に背を向けるようにウルトラマン、それに対峙する怪獣、10頭前後の動物が置かれ始める。しかしそれらはマリア像と直接的に関係しているようには配置されない。教会もまた右奥の隅に置かれるのみである。ウルトラマンは後に2体追加され、怪獣を囲んで戦っている様子が念入りに表現されたのに対して、マリア像と教会は、全体の中に他と関連をもたずに結局ただそこにあるだけといった用いられ方であった。(写真1)

#2 (5歳2ヶ月)・#3 (5歳5ヶ月)：

#2では、教会と神社が用いられたが、いずれも線路と柵で囲まれた内側に置かれ、やはり他のアイテムとの関連において明示的な繋がりとは付与されず、むしろ分断されているようでもあった。#3では、「後ろで見えないように…ガッシャー。」

と、教会が病院と箱の木枠との間に隠されるように置かれ、やはりその後は触れられないままであった。また、この回からしきりにビデオカメラを気にし始め、ビー玉や新幹線などを砂に埋める遊びが見られるようになる。

#4 (5歳8ヶ月)：

色んなものが埋められ、倒され、ひっくり返されて置かれる中で、病院の上の一番高い場所に慎重に立たされたマリア像は、遊びの中で放り込んだポストに当たり偶然倒れてしまう。続いて十字架像をコマのように回しながら砂にねじ込み、「この町を壊す気だー」と言う。さらに、大仏と白い十字架が箱に放りこまれた後、やけになったように他も倒し、「めちゃくちゃになっちゃったー。」〈めちゃくちゃになっちゃったね。〉「いいの、いいの。終わーりー。」

#5 (6歳2ヶ月)・#6 (6歳6ヶ月)・#7 (6歳9ヶ月)：

#5においても、アイテムを埋める、倒すなどの破壊的な表現は続いており、戦いと“死と再生”をテーマとしたような表現が見られるが、宗教的玩具の使用はない。#6では、“街作り”の過程で教会が使用されるが、家やマンションなどと同じように並べられ、結局は途中の早い段階で排除される。#7では、柵の一番上から順番に多量のアイテムを砂箱に放り込む。その中で入れるものと入れないものは区別されており、動物と人、マリア像、大仏、十字架は放り込まれるアイテムからは除外されていた。

事例1についての考察

本事例の場合、5歳8ヶ月(#4)まで箱庭の中に使用されていた宗教的玩具が、それ以降少なくとも完成作品の中には使用されなくなっている。ただし、#6では途中で排除され、#7ではあえて除外されていた、というように、むしろ箱庭表現の舞台上には登場しなくなったといった方が正確であろう。用いられ方は異なったとしても、4歳8ヶ月から6歳9ヶ月までの経過を通して、Aがマリア像、教会、十字架、大仏といったアイテムに対して、他と違った特定の意味を付与していることは確かであると思われるが、その意味の変容はどのように考えられるだろうか。

#1～#3においては、宗教的玩具を箱庭の中に

は登場させるものの、他のアイテムと関連させるのではなく、逆に関係を断ったものとして用いられている点が特徴的であった。それは宗教的玩具を箱庭の中での非日常的存在として扱う表現とも考えられ、“触れられない何か”を象徴しているとも言えよう。

#4において、その“触れられない何か”を間接的ながら偶然倒してしまい、それをきっかけに十字架と大仏は世界を壊す者の中心的存在として用いられる。非日常的で中立的な存在であった宗教的玩具が、それ以降に箱庭の枠内から外れることになったのは、破壊や死のイメージと結びつくことにより、“畏怖”すべき対象として、その意味が変容し、かつその他のアイテムとの関連の中に位置づけられたとも考えられる。つまり、#4の偶発的な接触を機に、Aにとっての宗教的玩具が、非日常的であっても使用することができる対象から、実際に使用することをためらうような“こわい”対象として変容するプロセスが見られたと言えるのではないだろうか。



写真1. 街の中央に置かれたマリア像
(事例1 #1 4歳8ヶ月)



写真2. お墓の後ろに置かれた大仏（手前右側）
(事例2 #5 6歳1ヶ月)

事例2 (B 男児)

#1 (4歳6ヶ月)～#4 (5歳7ヶ月)：

#1では、おもちゃを使っていいか、砂の上におもちゃを入れていいか聞いてから、控えめに使い始める。箱の右側が海、左が陸で動物が棲み分けている。戦って死んだ動物は箱外の白い囲いの中に入れられる。立会人とやりとりしながら説明する。

#2では、ウルトラマンや恐竜、鮫、シャチ、動物を戦わせたり、埋めたりして遊ぶ。

#3では、線路や建物、橋など多少の町の構成はあるが、ウルトラマン、ワニ、動物、恐竜の戦いがメインであり、戦って、埋まって、破壊されるなどの単発のストーリーが繰り返されている。

#4も初めに駅、線路、井戸、橋、学校などが置かれるがウルトラマンや恐竜、ワニの戦いで壊されるなど、戦い、破壊、埋まるという遊びを繰り返している。

#1～#4では宗教的玩具は使われていない。砂の上でウルトラマンと恐竜を戦わせたり、海の動物と戦わせたりする遊びが主に展開されていた。

#5 (6歳1ヶ月)：

初めは箱の中は海で、サメやシャチがいてウルトラマンが飛行機で運ばれ水の中に入れられる（砂で埋められる）。その後、木を立てるときに、砂でないと立たないため、箱の中が陸になり、箱の脇が海になる。ただ、砂に半分埋まったウルトラマンはずっとそこに横たわっていた。この回で木や花を初めて使用し、森ができた。いままで、ほとんど場作りをしないで、おもちゃをぶつからせて遊ぶことがメインだったので、本児の箱庭としては、新しい展開であった。柵を置いたときに柵が入っていた箱にお墓を二つ見つけ「どこに置いたらいいの？」と聞くが、自分の判断で手前右側の箱の壁に沿って二つとも置く。大仏を見つけ、これも、「どこに置くの？」と聞くが、自分で2つのお墓の後ろに置く。それから、子どもの象がカウボーイに捕らえられ、トラックに乗せられ警察に運ばれ牢屋に入れられる。働く車が並べて置かれた。その後、積み木でパズルを楽しんだ後、他のウルトラマン3体と埋まっていたウルトラマン1体を一番奥にしっかり立てて「石像」と名付け終わりにする。(写真2)

6 (6歳5ヶ月) :

箱の中で遊ぶことをやめ、隣の机に線路を敷き、家を4軒並べた。そのうちの1軒が教会であった。初めは10軒ほどの家が並べられたが、「2階が無いとだめ、小さいとだめ」という基準で取り除かれ4軒になった。家が火事になり、救急車がクレーン車と一緒に来て2階の窓ガラスを割り、人を救出するというストーリーが展開された。教会の隣の家までは人が救出されたが、教会には消防車ははしごをのばさなかった。また家から人は救出されるものの、その後、転落してしまい助からない場合がほとんどである。最後はクレーン車とはしご車は新幹線に突き飛ばされてどこかへ行ってしまう。暴走した新幹線も砂の中に埋まってしまう。

事例2についての考察

本児の箱庭あそびは年少の時から、戦いがメインテーマで展開されている。4体のウルトラマンと怪獣に見立てたと思われる恐竜や鯨、シャチなどの戦いがほとんどであるが、これらの動物同士の戦いもある。宗教的玩具が使われるのは本児の場合、年長になってからであるが、場がきちんと構成され、何かある程度まとまったストーリーが展開される際に現れている。#5では子どもの象が森でカウボーイに投げ縄で捕らえられ、ダンプトラックに乗せられて警察に連れて行かれ、牢屋に入れられる。このストーリーが大仏のあるところで展開されている。また、#6では、2階建ての家々が火事になり、クレーン車を伴ったはしご車が人々の救出に駆けつけるが、無事に家から救出されてもその後、落ちて死んでしまう。それが教会のある町で展開されている。

このような悲劇的なラストのある、構成された物語は、#4までの単発的な戦いよりも、迫力があり、見ている立合人も心を動かされる。原始的な単発的なぶつかり合いの戦いから、ストーリーをもった構成的な戦いに成長しているように思われた。

このような、現実にも起こりうる悲劇を補償するために、宗教的玩具(大仏、教会)が使われているのではないとも考えられる。救いのない結末を救うためのものなのか、あるいは宗教的玩具があることにより、自分の中の悲劇的なイメージを安心して表現することができるということなのかはわからないが、ストーリーと関連づけて宗教的玩具が置かれているのだと思われた。

事例3 (C 男児)

1 (4歳9ヶ月) :

見守り手に向かって「JR知ってるよ」と言い、線路を置く。全体的に、自分のおもちゃの方がすごいなど、おもちゃの説明をすることが多い。線路を一生懸命に組み立てようと、何度か試みるがあった。

2 (5歳3ヶ月) :

見守り手を交代した。すぐに、線路を繋げ、敷き始める。線路をしっかりと連結させようと何度も努力する。その後、新幹線など、水陸空の乗り物が次々と置かれる。ウルトラマンなどの空想生物や、ペンギンなどの動物が置かれ、大仏を角のほうへ置く。墓と神社を場所をためらいつつ置く。マンションと様々な大きさの家、ブランコを加える。蛇を取りだし、とぐろを巻いて角に置く。その後も、コブラと恐竜を置き、「もう終わった」と言う。見守り手が「いっぱい置いたね」と言うと、サメが船2艘を追いかけるように動かし、もう一体のウルトラマンがサメの前に立ちはだかる。見守り手が「終わった?」と聞くと手の砂を払って、立ち去った。

3 (5歳7ヶ月) :

迎えに行くと、挨拶以外の言葉は、交わさない。まず、線路を繋げようと頑張る。繋がるたびに見守り手が「ジャキーン」と効果音を付けるが、反応はない。新幹線やトンネルを置いていく。その合間に、砂を払うようなしぐさが見られる。スペースシャトルを置きながら何かをつぶやいているので、見守り手が「シャトルじゃん」とほそほ言うのと、「シャトルってね」とおもちゃの説明を始める。その後、標識と、パトカーなどの乗り物が置かれる。おもちゃの説明や、歌うようにおもちゃの名前を口ずさむ。橋を置いて、もともとあった標識をその上に置き「通れませ〜ん」と言う。橋は、その後2つ置くが、バス停や、大仏、十字架など、何かしらのおもちゃが配置される。見守り手が「終わりの時間だ」というと、すぐに立ち去った。(写真3)

4 (5歳9ヶ月) :

ほとんどは、見守り手に向かって話したり、机越しに追いかけてくをして過ごす。「砂の中には、いっぱい黴菌があるんだよ。これにも、ちっちゃい神様(大仏)も、これにも(十字架)。」と指をさ

し「雪は神様のごみ」と言う。「今日はあんまりやりたくない？」と何度か聞かれ、時間が過ぎたことに気づくと、そこから作り始める。まず、線路から置き始め、7分くらいで終えた。

#5（6歳3ヶ月）：

前回と比べ、背が伸びて大人びた印象になった。黙りこみ、真っ先に線路、電車と、真剣な表情で並べる。標識、トンネル、駅を置いた後、パトカーなど乗り物が置かれる。消防車や救急車は、パトカーと一列になるように並べ、列の先頭に標識を置く。ビー玉や貝殻を一つ一つ取りだして置く。標識を車の周りに道を作るようにして配置し、棚を眺め、船や灯台、貝殻を追加する。合っていなかった線路を外し、はめようと試みるが、一旦、箱に戻し、またすぐに取り出して、他の線路の脇に置く。線路の周りにシーソーや滑り台、神社を置き、遊具は線路の円の中に移し、橋を架け、家を置こうとするが止める。再び、ビー玉を置いたところで終了する。

#6（6歳7ヶ月）：

また他の見守り手に交代した。まずは、線路を丁寧に繋げて置く。乗り物や、橋、ビー玉などが置かれ、途中「すげえ」と小声で言うことがあった。時間が近いことを聞くと、病院や、家を置く。最後に「どうだった？」と聞くと、「楽しかった」とビデオを気にしながら小声で言う。

#7（6歳10ヶ月）：

今までも置かれた、線路、トンネル、駅、乗り物が置かれた。おはじきや、ビー玉で作った水辺には、フラミンゴやペンギン、金魚が、線路の輪の中には、蛇やシカが置かれ、サルや、カブトムシなどの昆虫が木に登っている。

事例3についての考察

Cは、#1（4歳9ヶ月）～#4（5歳9ヶ月）では、見守り手に話しかけたり、一緒に遊ぶなど、落ち着かない様子であった。#5（6歳3ヶ月）からの作品は、水陸の区別が徐々にはっきりとしていく。勢いのあるばらばらな表現が、やがて水陸の世界として表現され（#5）、#6～7で、きれいに水陸の世界へと統合された過程であるといえる。

作成に宗教的玩具が現れたのは、#2（5歳3ヶ月）から#5（6歳3ヶ月）までの連続した4回で

あった。神社に関しては、#2（5歳3ヶ月）において、神社の次にマンションやブランコが置かれ、#5（6歳3ヶ月）では、神社の次に遊具や橋が置かれ、家を手に取りまた戻っていた。神社は、本児にとって、遊具や住居と同じように、日常生活の身近な場面で見られるものとして使われているような印象を受ける。

しかし、#2（5歳3ヶ月）で角に置いた大仏に関しては、向かい側の角にある蛇と共に、箱庭の中の世界の守りととれるが、3つの家とお墓のそばに置かれているので、日常の景色の一部のようでもある。#3（5歳7ヶ月）の大仏と十字架は、橋の口に置かれ、標識とバス停は、橋の上に置かれ、「通せんぼ」をした。宗教的玩具も「通せんぼ」をするアイテムとして選ばれたのは、守りの効果や、偉大な力があると認識していることの、表現であるといえる。



写真3. 通せんぼに使われた大仏と十字架
(事例3 #3 5歳7ヶ月)

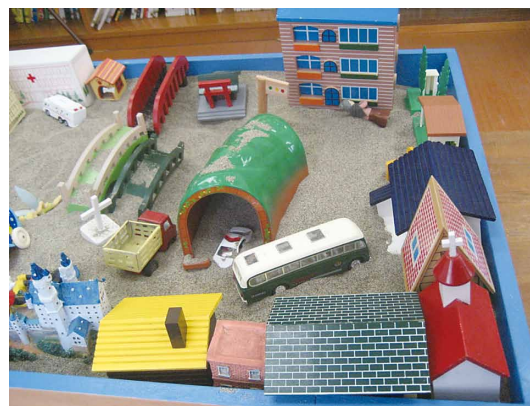


写真4. 危機の物語の後に置かれた神社と十字架
(事例4 #4 5歳5ヶ月)

事例4 (D 女児)

1 (4歳4ヶ月) :

緊張した様子。枠に沿って、建物をぐるりと並べていき、枠のみを作って終了する。その枠に使われた建物のひとつとして教会が使用された。

2 (4歳10ヶ月) :

立会人と会話をしながら枠の中でキャラクター人形を動かして物語をつくり始める。宗教的玩具の使用はなかった。

3 (5歳2ヶ月) :

2と同様に、街をつくりながら、その中で物語が展開する。駅からベビーカーに乗ってキャラクターたちが公園へお出かけする場面を作る途中で、「お家も建てよっか」と教会が置かれる。また、登場するキャラクター人形それぞれの家を決めるときに、たくさん建物を置き、その際に神社も配置される。

4 (5歳5ヶ月) :

箱庭の中をバスなどの乗り物がトンネルをくぐって巡る道中の、町の建物のひとつとして教会が配置される。おかれる人物・動物の玩具が現実的なものに変化してきた。

その後、幼稚園児が幼稚園に通う途中で雪に埋まってしまい、おばあちゃんに助けられるストーリーが展開する。助けてもらった後、おばあちゃんの家でお話をしてもらって…とお話をしながら机と椅子を置き、その後、少し離れたところに「神社」「分かれ道」と言って、神社と十字架を置く。(写真4)

5 (6歳2ヶ月) :

最初に箱庭の2辺を建物を使って枠を強化するように囲む。キャラクターそれぞれの家を定め、そこをバスや電車が巡るストーリーが展開される。

「いい事思いついた」といって、最初に置いた大きな建物を取り除いて枠を組み替える際に、教会を町の中(内側)に配置し、その脇に線路を丸く配置していく。その後、教会は特に使われずに乗り物がぶつかって倒されたままだが、最後にキャラクターたちが家に帰る際、教会を手にとって「ここどこ？教会。」「お家じゃないんだ」「そう、つまんない人だけが行くの」という。

6 (6歳5ヶ月) :

最初に、立会人とやり取りをしながら建物を選ぶでは箱庭の縁を囲んでいく。その際に教会や神社も使用する。神社は「護国神社」といって置き、脇にお墓も添える。「護国神社」は、その後展開するストーリーの中で、夜には門が閉まり、また人が入られないように昼にも柵でふさがれ他の建物とは区別される。

7 (6歳11ヶ月) :

最初は学校を中心とした町並み作りをしているが、中盤で、町並みの中に病院を置き、医者や担架に乗った人、子どもをおぶったお母さんなどを置く。その後に「神社」といって病院の横に神社を置き、「これ何」と問いかけてから、大仏を正面中央に置く。そして大仏の横に墓を3つ並べ、喪服を着た女性、灯籠、お坊さんを周辺に置く。その後神社をさらにひとつ加える。その後、建物をさらに加えて町を充実させる過程で、大きなガソリンスタンドを置くために大仏やお墓は柵に戻された。

8 (7歳6ヶ月) :

遊園地やサンタクロースなどファンタジックな場面と交番やガソリンスタンドなどの現実的な場面が共存する箱庭を作り、さまざまな人をちょっとずつ動かして遊ぶ。宗教的玩具は使用しなかった。

事例4についての考察

1 (4歳4ヶ月) では、たくさんある建物のひとつとして教会が利用され、# 3 (5歳2ヶ月) でも教会は「お家」と表現されている。この頃は、とくに宗教的な建物として、教会や神社を区別している様子はない。

しかし、# 4 (5歳5ヶ月) # 5 (6歳2ヶ月) では、はっきりと「神社」「教会」と発言しており、この頃になると、他の建物とは区別し、特別な建物として位置づけていることがうかがわれる。# 6 (6歳5ヶ月) での「護国神社」は神聖さを示すように柵で囲まれている。

さらに、# 4 では、幼稚園児が雪に埋まっておばあちゃんに助けられるという危機の物語の後で、近くに神社と十字架が配置されている。また、# 7 (6歳11ヶ月) では病院とその周辺の患者という、病、死を連想させる場面をおいた後に大仏や神社、墓といった一連の宗教に関連する玩具が置かれていった。日常場

面を作っていくために、それらの宗教的玩具は取り除かれる。ここでは、制作中に現れた、危機的イメージ、死への不安を喚起するようなイメージに付随して、宗教的玩具が用いられていると考えられる。

3. まとめの考察

以上4人の幼児の箱庭制作の様子を継時的に見てきた。箱庭に宗教的玩具が置かれる場合、その全てが、宗教的意味合いを持って置かれているとは断言できない(事例4の#1・3)。しかし同時に、各事例において、少なくともある年齢段階では、何らかの宗教的意味づけを持つものとして使われることがある。(事例2の#5・6、事例3の#2・3、事例4の#4・5・6・7)それらの事例では、宗教的玩具が、力強い存在や、悲劇的な表現が展開する時にそこにあるものとして置かれていた。また事例1の#1と#4のマリア像は、見方を変えれば町を見守る存在と見ることもできる。さらにこの2回を含めて事例1の全ての回での使われ方も、特別な意味を持つ超越的な存在として、また畏敬されるべきものとして置かれたといえよう。

対象となった幼児の箱庭において、年中児に集中して宗教的玩具が置かれたのはなぜか。マリア・モンテッソーリ(1979)は、宗教的敏感期としての幼児期に言及している。「子どもには宗教を感覚的に理解する鋭い敏感期がある」。「宗教的観点からいって大切な二つの時期がある。一つは感性から学ぶ時期(2-4歳)、そしてもう一つは教えられ指導されて学ぶ時期(5-7歳)である。2-4歳の子どもは宗教を感覚的に理解する鋭い敏感期にある。2歳と4歳の間に感覚的で同時に精神的な発達段階があって、この段階はその前の発達段階とくらべて一歩前進している。子どもの性格が感性的に富んだこの時期は、宗教的な観点からも配慮されなければならない。(——中略——)この年齢の子どもたちはとても敏感であるばかりではなく、私たちにわかる以上に深い理解力を持っている」。「この年齢の子どもが持っているいろいろな感受性の中で、保護されていると感じる必要性と、子どもが現に保護されているという安心感がある。従ってこの年齢で母親がおこなう宗教教育は子どもに超自然的な保護、とても権力のある保護者がいることを感じさせるものでなければならない」。更にソフィア・カヴァレッティ(1981)は以下のように述べている。「私たちが述べた諸要素は、宗教的な事実におい

て、しみじみとした喜びを味わわせるものであることを明らかにしています。事実私たちは、幼児期が神について晴れ晴れとした喜びを体験する時期であると信じています。そのような喜びの中で、被造物が神に答える返事というものは、深い喜びをもって贈り物を受け入れる事にあります。もちろん人間を努力とか戦いの中に巻き込むような異なった返事を求める時がやってくるかも知れません。私たちは、人間の成長が持つそれぞれの時期を尊重しなければならないのです」。

以上に見た宗教的敏感期という幼児理解に立つとき、4歳児クラスの幼児の箱庭あそびに集中的に現れた宗教的玩具の意味が理解される。それは、彼らが発達段階に従い、環境の中から自分を力強く守ってくれる存在を感覚的に感じ取り、自発的に取り入れている事の反映であると考えられる。敏感期(2-4歳)と、4歳児クラスの幼児(5歳)の年齢のずれは、イメージが育つ時期とそれが表現される時のずれと解される。

謝辞

本研究を行うにあたり協力いただいたZ幼稚園の子どもたちおよびご家族、職員の皆さまに心より感謝申し上げます。なお、本研究は新潟青陵大学大学院学内共同研究費の助成を受けて行なわれております。

IV. 引用文献

- カヴァレッティ, S. (1994) : 『幼児と宗教—3歳から6歳までの子どもとの体験報告——モンテソーリ教育第27号』(鷹嘴達衛訳)、pp.51-60(引用は55頁) : Sofia Cavalletti (1979, 1981) ¹ Il Potenziale Religioso Del Bambino, descrizione di un' ² esperienza con bambini da 3 a 6 anni.
- モンテッソーリ, M. (1996) : 『子ども-社会-世界』(クラウス・ルーメル、江島正子共訳)、ドン・ボスコ社、p.49-56 : Maria Montessori (1979) Spannungsfeld, KIND-GESELLSCHAFT-WELT.